

番組

(2:00) 仕舞 八島 (やしま) (シテ) 今井 克紀 (地謡) 豊田 正勝 宇高 徳成 豊嶋 晃嗣 宇高 竜成 上田 英和

狂言 貫聶 (むらい) (舞) 茂山 宗彦 (女) 山下 守之 (男) 茂山七五三 (後見) 増田 浩紀

(2:50頃) 能 鵜飼 (うかい) (シテ) 今井 清隆 (脇ツレ) 松本 義昭 (間) 茂山 逸平 (太) 前川 光長 (大) 谷口 正壽 (小) 曾和 鼓堂 (笛) 森田 保美

(4:00過ぎ) (後見) 金剛 永謹 廣田 幸稔 豊嶋 幸洋 (地謡) 徳田 宣幸 宇高 竜成 種田 道一 豊嶋 晃嗣 松野 恭憲 山田 伊純 金剛 龍謹

主催 今井後援会 後援 京都新聞社

仕舞 八島 (やしま)

八島の戦いに勝利するも、あの世では修羅道に落ちた源義経が苦しみながらも戦いの場面を見せる最後の場面。

能 鵜飼 (うかい)

鵜使いの亡霊が法華経の功力で極楽往生するといういわば法華経霊験記であるが、能としての狙いは前半の鵜之段、すなわちシテ鵜匠の老人が鵜をあやつり、鮎を獲る場面を見せる仕舞にあります。

最初、ワキとワキツレの旅僧二人が登場。安房の国から海路を経て武蔵の六浦に上陸、鎌倉を通って甲州に入り甲斐の国、石和川(いさわがわ)に到着。そこで土地の者(アイ狂言)に宿を乞います。しかしこの土地では旅の者に宿を貸す事は禁じられていたとの事にて断られ、やむなく川辺の御堂に泊まる態にて舞台脇座に着座致します。

すると囃子に乗り前シテ鵜使いの老翁が松明をかざして登場。舞台に立ったシテは殺生をする自身の罪業の深さを歎き謡いながら、いつもの通り鵜を休めるべく御堂に上がると旅僧に気付き言葉をかけます。すると一人の僧が、数年前石和川の

下流で一夜の接待を受けた鵜使いに似ているという、老翁は実はその鵜使いは禁漁を犯した罪により簀巻きにされて殺

害されたことを語り、自身こそがその亡者であると告げるのです。やがて僧の注文により老翁は罪障懺悔のために鵜を使う様を見せた後、折からの月明かりの中に消えて行き中入りです。例により先のアイ狂言、石和川在所の里人が出て鵜使いの漁翁のことを座して語ります。

やがて僧達は川瀬の石を拾い、法華経の文句を二石に一字づつ書きつけて川へ投げ入れ、亡者を回向していると、早笛というお囃子に乗り後シテ閻魔王が出現、橋掛かり一ノ松に立ち「それ地獄遠きにあらず」と謡い出し、かの鵜使いは殺生を重ねたため地獄に落ちるはずであったが、生前に僧に宿を貸した功力により救われて極楽に送られる事になったと告げ、これを送り届ける役柄として登場。閻魔王と聞くと身の毛もよだつのですが、本曲ではただ怖ろしいだけではなく、広く仏教の功德を説くという主旨を含んだ雄大な所作を見せたのち颯爽と退場致します。

前場の老翁が鵜を使う場面は、シテの独特の「松明」の扱いと、あの「面遣い」により正に目まぐるしく泳ぎ廻る鮎のサマが見事に表現される型どころとして舞い金剛自慢の仕舞であり、また地謡いの謡いどころでもあつて「鵜之段」と称する有名な部分です。

前シテ 三光尉 神でない老翁に使用
後シテ 小憩見 閻魔王などの鬼に使用